

令和 4 年 3 月 4 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03223

研究課題名(和文)日欧連携による教育としての武道に関する国際研究

研究課題名(英文) Budo as Education-International Research through EU-Japan Cooperation

研究代表者

酒井 利信 (Sakai, Toshinobu)

筑波大学・体育系・教授

研究者番号：40281711

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は“なぜ武道が教育として位置づけられるのか”という問題を、日欧の研究者が叡智を結集し国際討論を重ねつつ文献学的に明らかにし、更に現代社会における教育効果を調査研究により明らかにしようとするものである。最先端の武道学の動向を把握した上で、武道が教育として成り立つ変遷を理解するための「武道の鳥観図」を作成し、生涯武道、武士道思想について文献学的に明らかにした。更に、現代武道の教育効果について、大学生を中心とした調査により明らかにした。13回にわたり武道ワールド・セミナーを開催して議論を重ね、研究成果を2回の国際フォーラムとオンラインによる国際カンファレンスを開催することにより発信した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本発祥の武道は、世界に広がり盛んに行われているが、日本人とは異なり、外国では競技としての面白さもさることながら、日本文化としての武道に興味を持っている場合が多い。その傾向は、特に欧州に強い。日本人は武道の文化的特性をその教育効果に求めることが多いが、巨大宗教が人間教育を担ってきた欧州において教育としての武道は理解しづらい。しかし、近年、武道を青少年の道徳教育に援用できないかという動きも出始めており、本研究において教育としての武道の成立経緯や生涯教育としての特徴、現代社会における実際の教育効果について明らかなることにより、教育としての武道が世界に認められ発展することに寄与できるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study clarifies the aspect of "why Budo (martial ways) were established as an education", starting from the viewpoints of Japanese and European researchers through literary studies while gathering wisdom and conducting international debates, and further clarifying by research the educational effects of budo in modern society. After grasping the trends of the most advanced budo study, I created a "bird's-eye view of budo" to understand the transition of budo as an education, and made a literary study on lifelong budo and Bushido thought. Furthermore, the educational effect of modern budo aspect was clarified through a survey centered on university students. The Budo World Seminar was held 13 times for recurrent discussions, and the research results were disseminated by holding 2 international forums and online international conferences.

研究分野：武道学

キーワード：武道 教育 生涯武道

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本発祥の武道は、現在世界中に広がり普及されている。近年の傾向として、外国人の興味は競技としての面白さもさることながら、日本武道に潜む特有の文化性に向けられている(鍋山・酒井 2010)。つまり、武道を通して日本文化を知ろうとする意識が強くある。学术界において武道は、日本研究(ジャパノロジー)の対象ともなっている。こういった傾向は特に欧州に強い(阿部 2007)。しかし反面、武道文化に関する正確な情報が伝わっていないという事実も頻繁に指摘されている。こういった海外の動向をうけて、酒井らのプロジェクト・チームは、欧州側からの依頼により実技の普及とともに併せて武道文化の発信に努めてきた。又、科学研究費助成事業において、欧州との学术交流研究を継続的に遂行してきた。

こういった欧州との交流を進める中、近年、“なぜ武道が教育として位置づけられるのか”という疑問が投げかけられている。我われ日本人にとっては、教育の中に武道があるのは既成の事実であり当たり前のことである。中学校では、平成 20 年の学習指導要領改訂により必修化さえされた。更に身近な例で考えると、多くの親が、礼儀正しく何事にもへこたれない子供に育つと信じて我が子に武道をやらせている。しかし高所から俯瞰して考えてみると、本来は敵を倒すための技術であったものが、なぜそういった教育効果をもつようになったのか、不思議に思うのも自然なことである。我われ日本人は、この“不思議さ”にさえ気づいていない。この問題は、現代グローバル社会における武道の存在意義にかかわることであり、学術的説明は急務である。

本研究は、このテーマを、日欧の対話によって、解決しようとするものである。

2. 研究の目的

本研究は、“なぜ武道が教育として位置づけられるのか”という問題について、日欧の研究者が叡智を結集して国際討論を重ねつつ文献学的に明らかにし、更にこういった武道の現代社会における教育効果の実現の有無、つまり本当に武道を通して立派な心を育てられるのかという問題を文献学を越えて調査研究により検証することを目的とする。

3. 研究の方法

心身二元論を思考ベースとする外国人が一番わからない部分、つまり心身(関係)論を切り口としたアプローチを基軸として、最先端の武道学の動向を把握した上で、武道が教育として成り立つ変遷を理解するための「武道の鳥観図」を作成し、生涯武道、武士道思想について、文献学的に明らかにする。具体的な文献学的アプローチとしては、史料収集 データベース化 思想的背景の解明 国際討論による分析・考察、といった手順を踏んで、研究拠点を日本とハンガリーおよびルーマニアに置き、これらの拠点を繋ぎながら国際討論により、酒井等の研究グループが得意とする“史料の行間を読みつつ分析・考察を進める”。

更に、現代武道の教育効果について、大学生を中心とした調査により明らかにする。

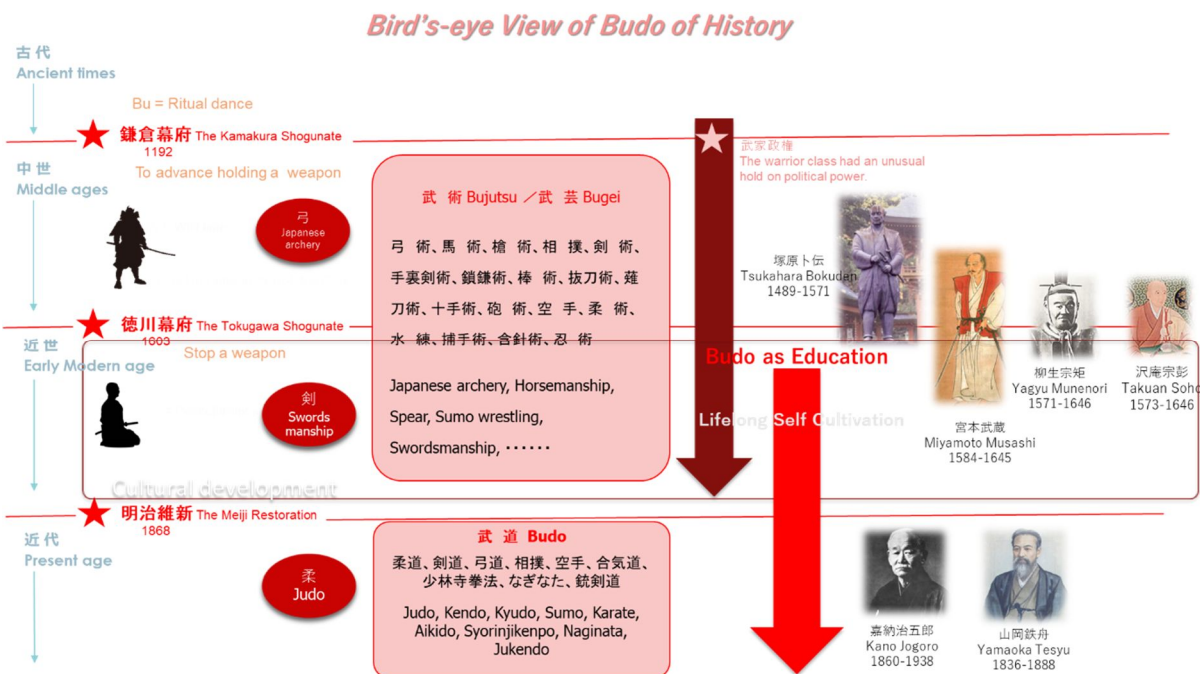
研究成果を国際フォーラムおよびオンラインによる国際カンファレンスを開催することにより発信する。また、バイリンガル・ウェブ・サイト「Budo World」により全ての情報を発信する。

4. 研究成果

(1) 武道の鳥観図

本来戦いの技術であった武道が教育として成り立ってきた経緯を理解するうえで、日本の歴史の中で武道がこういった変遷をへてきたのかを把握することが不可欠であり、海外からの要

望もあり日本史を踏まえた「武道の鳥観図」を作成した。



(2) 日本的技術観および教育論：「猫の妙術」を手掛かりに

「猫の妙術」は佚斎樗山が1827年の著したもので、日本武術の深遠な技術観を寓話形式で記述したものであり、山岡鉄舟が座右の書にしていたなど非常に有名である。

あらすじとしては、ある剣術家（勝軒）の家を舞台とし、難なく強い鼠を捕ってきた見栄えのしない古猫と、鼠の捕獲に失敗した猫たちとの対話を通して技術論を展開し、最終的には古猫が勝軒に剣術の奥義を諭すといったものである。

先行研究においては、『莊子』『木鶏』が原型となっていること、道家（老莊）思想の影響があること、修行課程論が提示されていることが指摘されている。いずれも各々の視点でこの説話に語られる日本武道の技術観を解き明かしているが、本研究はこれら先学の知見を踏襲しつつ更に議論を深め、最終的にはこれを教育論として位置付けようとするものである。

本論において明らかになったことは、以下の通りである。

- ・登場する猫が「若い気鋭の黒猫」・「虎毛の大猫」・「灰毛のやや年配の猫」というように少しずつ歳を重ねて描かれており、更に最強の猫は「古猫」と表現されているという点から、生涯にわたり修練する「生涯武道」の考え方が強く認められた。

- ・「技術」→「気」→「和」→「無心」→「無物」というように徐々に求める内容が高度になる段階的技術観が認められた。

- ・低いレベルであっても無用の段階はなく、その段階（年齢）でその内容に打ち込むことは次の段階に進むためには必要であり、各段階での修行が全て必要であるという考え方を明示していた。

- ・「我がいふ所を以至極とおもふべからず」（自らの境地とて究極の段階ではない）、「我また彼に、及ばざる事遠し」（私も彼に遠く及ばない）とって上には上があることを示し、無限の追及の必要性を示唆していた。

- ・「猫の妙術」の技術観は『莊子』『木鶏』が原型となっており、『莊子』の思想が著者である佚斎樗山に大いに影響を与えていることは間違いない。しかし生涯武道の意識は原型の

「木鶏」より「猫の妙術」の方が強く、日本武道の大きな特徴と言える。

・剣術論において「我あるが故に敵あり。我なければ敵なし」という究極の境地が示された。

我がない状態とは「無物」と表現され心に何のわだかまりも蓄えない状態と考えられていた。

・この技術観は従来指摘されてきたように道家(老荘)思想の影響を受けつつも、根底に易の思想が潜在することが明らかとなった。

・本史料は最終的に教育論として完結しており、「教えずに伝えるという」独特の教育論を展開していた。大きく俯瞰してみると、古猫が他の猫や勝軒に技術論を説くなど、この説話の内容全体が教育の書であるともいえる。

・この教育論には禅思想の影響が顕著に認められた。

(3) 近代武士道思想について

中世から続く武士社会の中で発展した武士道思想は、武士階級が消滅した近代に於いても長く語り継がれていった。近代の武士道思想は、近世への「回帰」と近代での「変容」を含んだ非常に興味深い思想である。そのような近代の武士道思想について考察を行うことは、「回帰」と「変容」の歴史を現代に応用して、これからの武道精神について再考する一助になるのではないかと考え、本研究に着手した。

これまで武士道思想に関する研究は時代を問わず多く行われてきたが、近代の武士道思想に関する分類、体系については定説と言われるまでに至るものはない。また、近代における剣術・柔術の正課編入運動の中で武士道はそれらの教育的意義を表す言葉として多く用いられているが、当時の帝国議会における議事録が武士道思想に関する資料として取り扱われた研究は管見の限り見られない。以上から本研究では第21回～第24回の帝国議会において政治家が用いた武士道の語の意味内容について、近代の武士道思想全体の分類、体系についての再考を踏まえつつ明らかにしていくこととする。

近世後期に隆盛した水戸学派の尊王攘夷論や平田篤胤の国粹主義等は、日本に伝統的に根付いていた天皇崇拜の精神を再度活気づけ、その動きは明治維新後さらに加速した。水戸学派らは明治23年に発布された教育勅語の序文にある「忠孝」の文字から、「政府が封建的な倫理を保存した」とその意味内容を曲解し、封建的な「忠孝」の思想を天皇崇拜の感情に押し込めた国家主義思想を生み出した。この思想が近代の武士道思想のルーツとなり、特に日清・日露戦争後はナショナリズムの勃興や新渡戸稲造『BUSHIDO』の発刊によって武士道への注目はさらに高まった。そのような時代背景の中で明治38年～41年に行われた第21回～第24回帝国議会では、剣術・柔術を正課として導入する建議案について議論が為されている。案の提出者である、衆議院議員の星野仙蔵は「日本ノ強国ニナツタノハ、全ク日本ノ武士道ニ依ル」「建國尚武の美風ガ、則チ大和魂トシテ、又武士道トシテ今日ニ傳ツタ」等と述べ、武士道を建国以来の精神、また戦争勝利の要因として語っている。これらは国家主義的な武士道論に特徴的な要素であり、星野は当時の政治的傾向と武道の教育的意義を武士道によって関連づけ、武道を正課とする必要を説いていることが分かる。

このような国家主義的な武士道の他には、新渡戸稲造『BUSHIDO』を始めとする「キリスト教的武士道」や、山岡鉄舟『武士道』、福沢諭吉『瘠我慢の説』などの、儒教的な伝統を受け継ぐ「和魂的武士道」が先行研究で分類として挙げられている。しかし天賦人權論を否定し東洋文化の優位を主張した山岡と西洋文化を理想としつつ私的な情の重要性を説いた福沢とでは本質的な違いが見られる為、その分類には今後検討の余地がある。

(4) 現代武道における教育効果について：剣道の寒稽古における心の成長に関する研究：武道における二系譜の精神性に着目して

剣道は、武道と呼ばれる日本の伝統的な身体運動文化の一つであり、その修練の主たる目的は、修練者の心身修養である。寒稽古は、冬季早朝に一定期間開催される剣道の伝統的な稽古法の一つである。伝統的に、剣道修練者は、しばしば、寒稽古を通しての修練が参加者の忍耐、精神力、倫理・道徳性を改善すると考える傾向がある。この信念は近代期に刊行された剣道書の記述に明らかである。本研究では、寒稽古を通しての修練によって剣道修練者の心のあり方に成長がみられるかどうかについて、3つの心理評価尺度を用いて検討した。研究は2つの手順で行われた。第1の手続きは、伝統的な武道の精神性について、及び寒稽古によって改善されると期待されている精神的な特徴について明らかにするための文献研究である。この文献研究を通して、道徳的側面と心理的側面という、武道における心の2つの側面があることを確認した。加えて、寒稽古の精神的な効果についての伝統的な考えとして、この2側面に影響を及ぼすとする見方が窺われたが、近代期剣道書での寒稽古にかかわる倫理や道徳に関する記述量は、心理的側面の記述よりも少なかったことも確認された。第2の手続きでは、武道の伝統的な2側面の精神性が寒稽古を通して改善されているかを評価するために、3つの心理評価尺度を選択した。これらは、2017年1月6日から13日に実施された寒稽古に参加した大学剣道修練者に適用された。スコアは、対応のあるt検定による統計処理によって分析された。その結果、心的外傷後成長尺度の結果において、「他者との関係」「人間としての強さ」「精神的(スピリチュアルな)変容」が有意に増加していることが明らかになった。この結果は、伝統的に考えられてきた寒稽古の精神修養効果の一端を支持する客観的なエビデンスとなりうる。

表 剣道の寒稽古前後におけるライフスキル、レジリエンス、および心的外傷後成長の各尺度得点の変化

尺度	下位尺度	稽古前	稽古後
個人的ライフスキル	計画性	81±1.8	82±1.6
	情報要約力	80±1.2	83±1.1
	自尊心	75±1.4	78±1.3
	前向きな思考	81±1.5	81±1.8
対人ライフスキル	親和性	9.1±1.4	9.4±1.2
	リーダーシップ	7.3±1.5	7.6±1.5
	感受性	8.7±1.5	8.9±1.4
	対人マナー	10.1±1.4	10.1±1.4
レジリエンス	資質的要因	41.8±6.6	43.2±6.8
	獲得的要因	32.2±4.1	32.8±3.2
心的外傷後成長	他者との関係	5.7±2.4	7.0±2.3 *
	新たな可能性	6.0±2.5	6.8±2.6
	人間としての強さ	4.7±2.1	6.7±2.5 *
	精神的変容	4.7±1.4	5.6±1.9 *
	人生に対する感謝	5.0±2.7	6.2±2.1

(5) 研究成果の発信

> Budo World Seminar の開催 (以下を含む 13 回)

Educational Power of Budo (Martial Ways). 13th Budo World Seminar (Online Conference), Tsukuba Japan - Romania, 2020.3.22

> 国際フォーラムの開催

2017 International Forum on Budo World -Concerning Educational Aspect of Budo-, Ibaraki JAPAN, 2017.12.9

2nd Budo World International Forum, Budapest 2019 Budapest, Hungary, 2019.8.28

> バイリンガル・ウェブ・サイトによる発信

「Budo World」 <https://budo-world.taiiku.tsukuba.ac.jp/>による発信

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 酒井利信	4. 巻 49-1
2. 論文標題 武道史における神授の思想について	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 武道学研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Timea Szilvia Kengyel, Junko Ohishi, Yoshinori Okade, Randeep Rakwal	4. 巻 Vol.1 No.1
2. 論文標題 Exploring the Educational Value of Bud? in the Framework of Japanese Junior High School Education: From the Perspective of Physical Education Teachers in Japan	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Sport and Olympic-Paralympic Studies Journal	6. 最初と最後の頁 1 - 15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石純子, 酒井利信, 木塚朝博, 木内敦詞, 坂本育未	4. 巻 24
2. 論文標題 剣道の寒稽古における心の成長に関する研究：武道における二系譜の精神性に着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 身体運動文化研究	6. 最初と最後の頁 31-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 酒井利信	4. 巻 25
2. 論文標題 「猫の妙術」にみる日本の技術観と教育論 - 日本武道のオリジナリティーを探る -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 身体運動文化研究	6. 最初と最後の頁 63-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 酒井利信
2. 発表標題 2017 International Forum on Budo World Concerning Educational Aspect of Budo 武道の教育力
3. 学会等名 身体運動文化学会第22回大会・第1回武道ワールド国際フォーラム（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大石純子・酒井利信・木塚朝博・木内敦詞・坂本育未
2. 発表標題 武道教育における現場を知る
3. 学会等名 身体運動文化学会第22回大会・第1回武道ワールド国際フォーラム（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 軽米克尊・酒井利信・大石純子・木塚朝博
2. 発表標題 近現代における直心影流に関する一考察 - 山田次朗吉以降の系譜を中心に -
3. 学会等名 身体運動文化学会第22回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Toshinobu Sakai
2. 発表標題 Kendo/Budo as Education; lifelong self cultivation
3. 学会等名 Romania Kendo Seminar（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Toshinobu Sakai
2. 発表標題 Outline of Budo History : From fighting Techniques to Means of Education-
3. 学会等名 Romania Kendo Summer Seminar (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 軽米克尊
2. 発表標題 近代における直心影流に関する一考察 山田次朗吉と東京商科大学を中心に
3. 学会等名 日本武道学会第49回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Toshinobu SAKAI
2. 発表標題 Kendo/Budo as Education; lifelong self cultivation
3. 学会等名 Romania Kendo Seminar (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 筒井雄大・酒井利信・大石純子
2. 発表標題 大日本武徳会設立当初の様相に関する一考察 新聞記事を手掛かりに
3. 学会等名 身体運動文化学会第23回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堀川峻・酒井利信・大石純子
2. 発表標題 近代における武士道思想に関する一考察
3. 学会等名 身体運動文化学会第23回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Toshinobu Sakai
2. 発表標題 Considering the technical term “budo” and “bujutsu”: Focusing on Donn F. Draeger’s literary works and training
3. 学会等名 International Budo Forum, Division of Kendo, Japanese Academy of Budo
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toshinobu Sakai
2. 発表標題 Educational Power of Budo (Martial Ways)
3. 学会等名 2nd Budo World International Forum, Budapest 2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toshinobu Sakai
2. 発表標題 The bird’s eye view of Japanese Budo (Martial Ways)
3. 学会等名 2nd Budo World International Forum, Budapest 2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toshinobu Sakai
2. 発表標題 The Japanese concept of technique and education theory in “Neko no Myojutsu” (The Cat’s Eerie Skill)
3. 学会等名 2nd Budo World International Forum, Budapest 2019
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 筒井雄大・酒井利信・大石純子
2. 発表標題 大日本武徳会に関する一考察 設立当初の新聞記事（1895～1899）に着目して
3. 学会等名 日本武道学会第52回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 二宮恭子・酒井利信・大石純子
2. 発表標題 武道の宗教性に関する一考察 新当流『兵法自観照』を中心に . 身体運動文化学会第24回大会
3. 学会等名 日本武道学会第52回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田嶋結・酒井利信・大石純子
2. 発表標題 外国人の日本論にみられる武道に関する一考察
3. 学会等名 日本武道学会第52回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Toshinobu Sakai, Junko Oishi, Yudai Tsutsui, Takashi Horikawa, Camelia Spiru, Kyoko Ninomiya, Tomomi Abe, Yui Tajima
2. 発表標題 Body and Mind Theory in Educational Power of Budo (Japanese Martial Ways)
3. 学会等名 ARIHHP Human High Performance International forum 2020 "Sports Sciences for Olympic and Paralympic Games"
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Toshinobu Sakai, Junko Oishi, Takashi Matsui, Kyoko Ninomiya, Yudai Tsutusi, Takashi Horikawa, Yui Tajima, Tomomi Abe, Sorin Mahika, Luca Mihai, J´za Levente, Camelia Spiru
2. 発表標題 Educational Power of Budo (Martial Ways)
3. 学会等名 13th Budo World Seminar (Online Conference)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 大石純子・酒井利信他・征矢英昭・坂入洋右・高木英樹・中込四郎・鈴木健嗣・前田清司・長谷川聖修・遠藤卓郎・菊池章人・林洋輔・江田香織・西保岳・森達人・清水諭	4. 発行年 2016年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 237(190-209)
3. 書名 たくましい心とかしこい体 - 身心統合のスポーツサイエンス -	

1. 著者名 酒井利信著・李炯旻訳	4. 発行年 2016年
2. 出版社 ヘト出版	5. 総ページ数 176
3. 書名 日本剣道の歴史（韓国語版）	

1. 著者名 酒井利信	4. 発行年 2018年
2. 出版社 デザインエッグ	5. 総ページ数 224
3. 書名 武道研究の道標	

1. 著者名 酒井利信	4. 発行年 2018年
2. 出版社 デザインエッグ	5. 総ページ数 251
3. 書名 武道研究の最前線	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>Budo World https://budo-world.taiiku.tsukuba.ac.jp/ バイリンガル・ウェブサイト Budo world https://budo-world.taiiku.tsukuba.ac.jp/</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	<p>軽米 克尊 (Karukome Yoshitaka) (00733148)</p>	<p>天理大学・体育学部・講師 (34602)</p>	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大石 純子 (Oishi Junko) (50410163)	筑波大学・体育系・准教授 (12102)	
研究分担者	阿部 弘生 (Abe Hiroo) (40570479)	東北文教大学短期大学部・その他部局等・講師 (41503)	
研究分担者	村上 雷多 (Murakami Raita) (10737092)	大阪体育大学・体育学部・講師 (34411)	
研究分担者	木塚 朝博 (Kizuka Tomohiro) (30323281)	筑波大学・体育系・教授 (12102)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関